

Title	分析と実践の峻別：シュンペーターの一断面
Sub Title	Sharp distinction between analysis and practice : a phase of Schumpeter
Author	蓑谷, 千鳳彦
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.6 (1984. 2) ,p.794(62)- 817(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19840201-0062
Abstract	
Notes	小特集：ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター：生誕100年
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840201-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

分析と実践の峻別

——シュンペーターの一断面——

蓑谷千鳳彦

序

後期ハプスブルク朝の首都ウィーンは、世紀末の暮照のなかに、華麗で多彩な文化の華を咲かせた。それはオーストリア-ハンガリー二重帝国の落陽の最後の輝きでもあった。

1859年、サルジニア・フランス軍に敗れ、1866年にはプロシアに敗れて、軍事機能遂行者としてその無能を露呈した封建貴族に代って、オーストリアのブルジョワジーは国家会議において発言権を増した。新支配階級は新しい都市ウィーンを建設することによってその勝利を祝福した。リング・シュトラッセ（環状道路）がそれである。

シュンペーターが生誕した1883年頃、ウィーンの町は世界的都市にふさわしく相貌を一新しつつあった。トルコ軍に備えるための城壁は撤去され、ウィーン市域は拡張された。国立オペラ劇場（1869）、帝国議会（1883）、ウィーン市庁舎（1883）、ウィーン大学（1884）、宮廷ブルク劇場（1888）があいついで完成した。これらは伝統的なバロック建築から脱した自由な、個性的なスタイルでつくられ、リング・シュトラッセを美しく飾ることになった。

建築物によってその力を誇示したブルジョワジーであったが、彼らは政治的・社会的改革に着手せず、植民地獲得競争にも参加せず、最初は古典演劇や古典音楽の後援者として、後にはその熱烈な支持者として貴族文化に同化しようとした。なぜならオーストリアのブルジョワジーは貴族を駆逐しえず、完全に権力を掌握することができなかったからである。シュンペーター独特の重層的社会構造論の1つの歴史的背景がここにある。貴族を屈服させることができなかったオーストリアのブルジョワジーは社会的・政治的变化に適応した自らのブルジョワ社会を建設することができず、貴族文化の模倣、同化、耽溺によって上層階級としての自らの地位を錯覚のなかで築いた。それは、硬直化しつつあるハプスブルク朝からの逃避を意味した。

しかしたとえ価値真空、社会的無関心、現実からの逃避のなかで咲いた文化の華であったにせよ、それが「華麗なる没落」（シュテファン・ゲオルグ）の崖畔で咲いた華であったにせよ、世紀末ウィー

ンは絢爛たる文化をもった。

文学の畑には、満ち足りた世界を攻撃し、娼婦のなかにかえって清純さを発見した世紀末ウィーンの奇人、ボヘミアンのアルテンベルク(1859~1919)、『輪舞』を著した「若きウィーン」派の代表的作家シュニッツラー(1862~1931)、早熟の天才で、すでに完成した偉大な詩人、劇作家ホーフマンスタール(1874~1929)、『^{たいまつ}炬火』を創刊し、戯曲『人類最後の日々』によって時代と第一次大戦を批判し、オーストリア帝国の没落を描いたカール・クラウス(1874~1936)、世紀末から第一次大戦前夜のウィーンを舞台にして、落日のオーストリア帝国を描いた『特性のない男』の著者ムシル(1880~1942)、『昨日の世界』によって、「私の運命ではなく、ひとつの世代全体の運命」を語り、『ジョゼフ・フーシェ』、『マリー・アントワネット』などのすぐれた伝記を著し、ヨーロッパの自己破壊に幻滅して自殺したツヴァイク(1881~1942)、オーストリア帝国没落を描いた『ラデッキー行進曲』のロート(1894~1939)がいた。ハンガリーのプラハにはリルケ(1875~1926)とカフカ(1883~1924)がいた。

音楽では、作曲家であり、すぐれた歌劇指揮者、ウィーン国立歌劇場監督者のマーラー(1860~1911)、作曲家であり、12階音楽の創始者シェーンベルク(1874~1951)がいた。画家には宮廷ブルク劇場の壮麗な階段の天井画によって有名になり、ウィーン分離派の指導者となったクリムト(1862~1918)、風景、肖像画を描いたココシュカ(1886~1980)がいた。

科学の世界でも多数の人材が輩出した。物理学者であり、哲学者でもあるマッハ(1838~1916)は、シュンペーターがウィーン大学法学部に入学した1901年に、ウィーン大学哲学教授であった。物理学に確率論的考察を導入し、統計熱力学を生み出した理論物理学者ボルツマン(1844~1906)、降雨の理論で有名な気象学者ハン(1839~1921)、アルプス氷河の権威である地理学者ペンク(1858~1945)、そして神経病学者フロイト(1856~1939)は1902年から38年までウィーン大学神経病学教授であった。また当時のウィーンは世界の医学の中心であった。

哲学者にはウィトゲンシュタイン(1889~1951)がいた。彼の『論理哲学論考』は、第一次大戦でオーストリア軍に志願したウィトゲンシュタインが兵役勤務中に執筆した書である。

経済学の世界では、限界効用原理の創始者カール・メンガー(1840~1921)、ベーム・バヴェルク(1851~1914)、ウィーザー(1851~1926)がオーストリア学派を形成した。ベーム・バヴェルクのウィーン大学における静かな実り多き10年間(1904~1914)の教授活動の時期に、学生として、シュンペーターは彼のゼミナールに参加した。夏学期のこの一連のゼミナールにおける討論を通じて、シュンペーターはベーム・バヴェルクからオーストリア学派の理論を、そして学者たるべきもの、時局問題の外で超然として、真の仕事に没頭すべきであるという学者の態度を学んだ。

ベーム・バヴェルクはハプスブルク朝オーストリアの蔵相を3度(1895, 1897~98, 1900~04)つとめ、政治家としても成功した稀有な人物であったが、科学者としては、時事問題の討議に口角泡

を飛ばすというような態度とは無縁であった。シュンペーターはベーム・バヴェルク追悼論文で述べている。「彼は時局問題の討議の外にとどまったのである、——何故であるか。この種の討議は実践の係争論点によって支配せられ、聴衆の水準によって制約せられており、一層長く、一層深く、一層推敲せられた方法には堪え得ないものだからである。これらは科学をして大衆的討論の水準——過去二百年の間同様にとどまっていた議論——に縛りつけるからである。これらの討議はいわば「瞬間生産」、すなわち機械を用いざる経済的生産に類するが如き種類の研究にむけられており、その焦慮のために理論家をして息つく余裕をゆるさず、真の仕事に沈潜する時間を与えない——せいぜいのところそれらは既存の知識の単なる応用たり得るに過ぎないからである。しかしそれらは人を魅するものであり、しばしば政治的情熱の迸りによって燃えたとされる。そうしてまさにかくして多数の経済学徒をしてその全時間を、また大多数のものをしてその時間の多くを、これに投ぜしむるに至るようになるのである。わが経済学の領域において事物の進行が緩慢なる理由の一つはここにある。ベーム・バヴェルクは来るべき数世紀の後——今日「知性の遊戯をなす」と見られることも恐らくは実践的収穫をもたらすと予想される時——のために働いたし、あらゆる誘惑にも拘らず時代をしてそれ自らの道を進ましめ、人をして自ら欲するところを語らしめるのを自らの義務であると理解した」⁽¹⁾。

いうまでもなく、シュンペーターのこの人物評は、ベーム・バヴェルクという鏡に自分自身を映し出しているのであるが、このような姿勢を読みとったこと自体、シュンペーターが彼から受けた影響を語っている。

新しい文化を開花させたウィーン、コスモポリタンの都市ウィーン、調和と寛容、共存共栄の都市ウィーンを、シュンペーターと同世代の作家ツヴァイクは次のように描写している。「ヨーロッパの都市でウィーンほど、文化的なものへの欲求を情熱的に持っているところはなかった。その君主国が、オーストリアが、何世紀このかた政治的に野心を抱きもしなかったし、その軍事的活動で特に成果を収めもしなかったゆえにこそ、郷土の誇りは芸術的な優越を得ようとする願望に最も強く向けられた」⁽²⁾。ヨーロッパ文化のあらゆる流れが合流し、ヨーロッパ諸民族の血の交流がみられたウィーンにおいて、すべての対立は「ひとつの新しい独自のもの、オーストリア的なもの、ウィーン的なものへと調和」⁽³⁾せしめられ、解消させられた。「文化摂取の意欲を強く持ち、受容力に対する特別な感覚に恵まれて、この町は異質な諸力を自己に集め、それらの緊張を解き、弛め、和解決させた。ここのこの精神的な宥和の雰囲気のうちには生きることは平穏なことであった。そして知らず知らずのうちにこの都市の市民の一人一人が、超国民的なもの、コスモポリタンなもの、世界市

注(1) [24] 226～7頁。

(2) [30] 31頁。

(3) [30] 32頁。

分析と実践の峻別

民へと育てあげられていった」。⁽⁴⁾

1883年2月8日、オーストリア領モラヴィア地方のトリシュで生まれたシュンペーター自身、いくつかの民族のオーストリア的血の交流による所産であったし、10歳以降ウィーンで過ごしたシュンペーターがコスモポリタンのな、宥和な文化的雰囲気の中なかで育かれ、人格を形成させていったことはいうまでもない。処女作『理論経済学の本質と主要内容』序言冒頭で、「すべてを理解するとはすべてをゆるすことである」とシュンペーターは述べた。シュンペーター理論の寛容性・多面性は、すべての対立を調和させ、同化させたウィーンのとての雰囲気と見事に合致する。

「この町、この民族は、ほかのどの町や民族もが持っていたと同様の欠点があったにもせよ、たぐいえない美点をもっていました」とツヴァイクは昨日のウィーンを回想する。「それは高慢でなかったということ、自分の町のしきたりや考え方を高圧的に世界に強いようとしなかったことです。ウィーン文化は、決して征服する文化ではなく、それだからこそ、この町をおとずれる人たちはよるこんでウィーンのとりになるのです。対立するものとまざり合い、このたえざる溶けあひからヨーロッパ文化の新しい要素を創りだしてゆくこと、これこそこの町の生まれながらの才能で⁽⁵⁾した」。

ツヴァイクの描写する高慢さのない、寛容の都市ウィーンはまさにシュンペーター自身でもある。ハーバード大学時代、シュンペーター・ゼミナールで学んだスウィージーはシュンペーターを「かれは……自説を他人におしつけようなどとはしなかった……そして、教師としては全く珍しいことなのだが、学生なり同僚なりを評定するにあたって、かれらがどの程度かれに同意するかによってそれをきめるようなことは絶対にしなかった。ケインズ学派の人たち（1936年以降の時期にはいつも絶対多数を占めていた）も、マルクス主義者（私がケンブリッジにいたあいだ、しばしば一名から成る少数派であることが多かった）も、かれとの交わりにおいては同じように歓迎されたものである。われわれが自分で考えるということを怠らなかつたかぎり、どんな考えをもっていたかということは、かれは気にならなかつた。そしてこの点でかれの期待にそむかないならば誰でも、個性の上での相違や考え方の上での相違にかかわらず、かれの誠をこめた支持を受けることができたのである」と評している。⁽⁶⁾「早熟の天才」、「恐るべき子供」といわれたシュンペーターという人間そのものが、ホーフマンスタールと同様、世紀末ウィーンの生んだ傑作であった。

しかしウィーン文化がその盛満を誇っているとき、時はたとえ「騎兵らくだぐらいの速度」（ムッセル）にせよ動いていた。二重帝国の桑榆にはかげが迫り、緩慢ではあるが確実に衰微と没落への道をころがり始め、ハプスブルク朝は2千年の歴史を閉じようとしていた。リング・シュトラッセの壮麗な建築物も、国立オペラ劇場における舞踏会も、宮廷ブルク劇場の演劇も、かずかずの多彩な

注(4) [30] 32頁。

(5) [29] 41頁。

(6) [16] 20頁。編者序説。

文化の華も、第一次大戦によって海の彼方に沈むハプスブルク朝の夕陽の輝きであった。ハプスブルク朝が硬直化し、現実への適応力を喪失しつつあったからである。

オーストリア自由派が旧支配階級に抗するために解き放った大衆のエネルギーは、皮肉にも自由派へはね返り、オーストリアーハンガリー二重帝国の解体を促すことになった。大衆のエネルギーはチェコ民族主義、汎ドイツ主義、キリスト教社会主義、社会民主主義、シオニズム⁽⁷⁾となって現われ、政治体制を麻痺させた。ハプスブルク朝の制度、原則、モラルは民族主義や新大衆運動に対処できなかった。対処できなかったどころか、「⁽⁸⁾宮殿の軍事力と外交的な制御力は、そのオイル・ランプや18世紀の設備とともに、手を触れないまま保存された」ように、体制は硬直化した。社会的・政治的論議が、現実⁽⁸⁾に根ざした、真の、実質的なものではなく、ハプスブルク朝の制度や憲法に抵触しない限りの偽装のもとでなされるとき、実生活上の要求、利害、対立、軋轢が政治や行政に反映されず、制度的対応もないまま放置されるとき、公的生活と私生活との間の分裂、人為的虚構性が拡大・深化するとき、現実から芸術・文化へと逃避する人が現われる。経済学の実践的勧告をかたくなに拒否するシュンペーターに、世紀末ウィーンのニヒリズムを感じるのは私だけであろうか。落日への歩みのなかで華美な文化をもったウィーンの世紀末的状况は、その成功ゆえに資本主義の没落を予言するシュンペーターの歴史観とも奇妙に重なり合う。

限られた紙幅のなかで、シュンペーターの全体像を描き出すことはできないし、その能力も私にはない。本論文においては、シュンペーターの特異な面、実践的勧告の峻拒をとりあげたい。

1

経済学とは経世済民の学でなければならない、というアングロ・サクソンの経済学をわれわれは疑問なく受け入れ、政策志向のない経済学は非現実的であるときめつけることに余りにも急である。

シュンペーターは、しかし、分析と実践的勧告とを峻別する。学界は現実の問題に深入りしないほうがよい。現実の時事問題にばかり専念したり、もっぱらそれに優先的にかかわり合っていれば、純科学的観点に立った仕事にたいする興味は圧殺されるおそれがあり、ひいては科学の進歩がおびやかされるおそれがある。一般にとりあげられているような現実の問題が社会科学の方法の完成や社会科学の一般的成果の向上に役立つことはまずありえないし、あったとしてもせいぜい社会科学応用のきっかけをつくってくれる——それもきわめて例外的であるが——ぐらいが関の山である。⁽⁹⁾科学にとって現実の問題は、いわば生産活動にさいしての基本的な栄養源摂取のようなものである。

注(7) [10] 152~153頁。

(8) [3] 322頁。

(9) [14] 161頁。

分析と実践の峻別

非経済的要因を与件とし、経済的要因の若干を「他の事情にして一定ならば」という限定された状況のもとで分析する理論モデルからの論理的帰結を、直ちに、実践的課題と結びつけることはできない。現実の世界は非経済的要因が所与でもなければ、他の事情一定でもない。その上、政策論議には否応なしに価値判断あるいはイデオロギー的偏見が忍びこむ。またそうであるがゆえに、冷静な分析をしないで、人は気軽に政策論議に花を咲かせ、自らの願望を議論のなかへもちこむことがとくに経済の知識領域で生ずる。「経済的なことがらについてだけ、誰れもが自分を資格のある専門家と考え、他愛もなく数百年も前の林間道路をうろつき、厚かましくも、自分のまったく個人的な——経済的または観念的な——関心を、あたかも完全に正しい最高の結論だと、明言してはばからないのである」⁽¹⁰⁾。

実践の場で個人的なおしゃべりをするのは経済学者も同じである。理論家としては自由放任論者であった人々が、「政治的応用が討議される際には、いつでも自分たちの政治的好みを洩らしている悪い慣例に耽溺していた」⁽¹¹⁾という実例をシュンペーターはみえてきた。分析的結論が余りにも安易に実践と結びつくことによって、本来没価値的な分析が、イデオロギー的色彩に彩られた実践的応用を支える理論的基礎として政治的に利用され、理論が政治と運命を共にすることをシュンペーターは危惧した。時には政治的敵意が政敵の理論的支柱とみなされている経済理論への敵意となる。この敵意には理論家自身にも責任がある。「経済学者は、政治に物ずきに手を出し、政治的処方箋に骨を折り、自らをもって経済生活の哲学者なりとして手を差しのべる強い性向に浮身をやつしたし、またがくすることによって、彼らが自らの推理に導入した価値判断を、明示的に叙述する義務を等閑に附していた」⁽¹²⁾からである。

分析的結論から実践的勧告へ至るまでには長い道程を歩まなければならない。「われわれの到達するどんな結論も事態を読者がいっそう明白に知るに役だつ以上のことをなにもやることはできない……。このことと実践の評価ないし勧告との間には実際長い道程が横たわっている。そうして、われわれのうちのだれでも、かれ自身の個人的な希望、偏見、幻想の重荷をにないながら、ただ一人⁽¹³⁾でこの道程を旅しなければならないのである」。時局討論のために経済理論が政治的に利用される愚は避けねばならない。すぐに役立つ経済学はすぐに役立たなくなる経済学でもある。われわれは労賃基金説やマルサスの人口論等々の科学的建築の一石一石が粉碎されるとともに、実際的な結論が次々と事実によって否定された19世紀の状況を知っている。実際問題に余りにも深入りし過ぎたため、分析がおろそかにされ、経済学はそのエネルギーを現実問題で消耗し、内部から注目に値する分析技術を生み出し得なかった時期があった。

注 (10) [15] 7頁。

(11) [25] 1879頁。

(12) [25] 36頁。

(13) [20] 1355頁。

このように経済理論と実践を峻別するシュンペーターの立場は、次の文章にも明確に示されている。「われわれは歴史家との間に了解を得ることはできるが、政策論を弄する理論家との了解は不可能である。まったく純粹理論からして政治の最高問題を論じようとする徒輩——彼は遺憾にもイカルスに似ている——あるいは理論を政治的討論に利用するためにのみ理論研鑽に従事するの徒は、理論の最悪の敵である。理論を基礎として何事かを要求し、何事かを弁護し、あるいは攻撃せんと欲するならば、それは理論の本質および課題の誤認に基づいている⁽¹⁴⁾」。

種々の著作から同様の文章を引用してきたのは、実践的勧告に対するシュンペーターの姿勢は、処女作『理論経済学の本質と主要内容』以来終始変わることがなかったという点を確認しておきたかったからである。確かに、ハプスブルク公国滅亡後の1919年、祖国オーストリアに誕生した社会主義政権であるカール・レンナー内閣の大蔵大臣に就任、卑劣な噂によってわずか7か月で辞任したという挫折の経験が、政策とは政治であるというシュンペーターの信念を一層強固にしたことは疑いない。しかしこの経験はシュンペーターの本質を変えはしなかった。

シュンペーターがこのように分析と政策の間に明確に境界線を引き、いわゆる処方箋を書こうとしなかった理由を次の3点に分けて論じよう。

- (1) 理論の世界と現実の世界の相違
- (2) 政策への価値判断の混入
- (3) 資本主義観

2

分析から実践的応用へと進むためには、分析レベルでは与件とされていた諸々の経済的・非経済的要因を考慮しなければならない。あるいはある理論にもとづいて実践的勧告をする前に、その理論の限界を認識すべきである。

分析上与件と考えられている諸要因には、歴史的環境、地理的環境——気候、土地の性質、制度、法律、組織、所得分配、資産分配などがある。理論の世界では与件であったこれら諸要因は、現実の世界では必ずしも与件ではないし、あるいは所得分配のように政策いかんによって変化する要因もある。与件が異なれば理論の適用範囲も変わり、それゆえ与件の相違を超えて分析的結論を実践的応用と直結することはできない。

非経済的与件の変化をも考慮した壮大な体系を構築することは不可能であるがゆえに、理論家たちはしばしば抽象化、孤立化の方法によって経済変数のいくつかを与件と仮定して、主要な変数間の単純な関係を樹立した。ところが狭隘な理論の限界を超えて、かれらはそこから一挙に政策的帰

注(14) [11] 559頁。

分析と実践の峻別

結を得ようとした。「リカードの弊風」Ricardian vice とシュンペーターがよぶ理論家の悪弊である。

リカードにとって「経済体系のあらゆる要素の一般的相互依存関係というような包括的なヴィジョンは、恐らく……一時間の睡眠の価値にも匹敵しないものであったであろう。彼の関心は、直接且つ実際の意義をもつ截然たる結論にあった」。このような結論に到達するため、リカードは「一般的な体系を個々の断片に細分し、できうる限り多くのその部分を束に縛りつけて、これを冷蔵庫に仕舞いこんだ——かくてできるかぎりの多くのものが凍結され、「与えられたもの」になされた。然るのちに彼は1個の単純化をなす仮定を一つ一つ重ねていき、これらの仮定によってあらゆるものを全く固定せしめ、遂にはただ若干の集計的な変数のみが残されることとなった、そしてこれらの変数相互の間に、上述の仮定のもとで、彼は簡単な一方交通式の関係のみを設定した、従って終局においては、希求されていた結論がほとんど同義反復のようになって現われてきたのである」。たとえば、利潤は穀物の価格に「依存する」という有名な定理が明々白々であるのは、穀物価格以外の変数はすべて与件、すなわち凍結されているからである。「これは決して反駁されえないものであり、欠けているといえば唯センスのみであるといったような見事な理論である。このような性格の理論を実際問題の解決に適用せんとする風習を、われわれはリカードの弊風と呼びたい」⁽¹⁵⁾

ケインズの『一般理論』はこの「リカードの弊風」の現代版である、とシュンペーターはケインズを批判する。すなわち「一つの薄弱な基礎——それはその任には堪えないがその簡潔性のために、たんに人を引きつけるのみならず、また人を説得する力をもつもの——の上に極めて重い実践的結論の荷を積み重ねる風習」⁽¹⁶⁾の顕著な一例が『一般理論』である。

「リカードの弊風」の最新版をわれわれは経験したばかりである。マクロ合理的期待派の、自由裁量の金融・財政政策は実質変数に影響を与えないという主張である。彼らは、ルーカス型供給関数を含むきわめて単純かつ特殊な理論モデルからの（特殊な）論理的帰結から、一挙に、ケインズ的自由裁量政策の無効性、したがって政府は政策介入すべきではないという実践的結論を導き出した。この結論を彼らは新しいパラダイムであると自負し、大砂塵を巻きあげ、その砂けむりのなかにケインズ学説を葬り去ったと錯覚した。シュンペーターの次の言葉は、マクロ合理的期待派にも適切である。「当事者がみずから「新しい」と感じるような学説はいずれも大量の砂塵を巻きあげますし、見物人のまなざしは何よりもまずこの新学説の挑戦的論争や筋書き口上などのもうもうたる砂塵に集中してしまうからです。市場の叫喚の渦の中にはほとんど必ずといってよいぐらさまさまの毛色の変ったスローガンや^{きょうかん}聞の声が混在しているものです。それらはいずれも学問的な仕事を阻む役割を果たすという一面とともに、人びとの関心を喚起して学問的な仕事を促進するという反面ももっているわけですが、学問的な仕事というのはその深層においては、このようなスロー

注 (15) [25] 以上引用3箇所はすべて995～6頁。

(16) [25] 2462頁。

ガンや関の声などによって左右されるものではないのです」。⁽¹⁷⁾

時が流れ、分析技術が進歩しても、分析的枠組みでは考察対象とならなかった事物が、現実の世界では考慮されなければならないというシュンペーターの警告、至極当然の警告が依然生きているというところに、経済学ではなく、人間の弱さが露呈している。

3

(1) 実践的な処方箋への価値判断の混入

シュンペーターが経済政策すなわち処方箋を提示しようとしなかったのは、市場の自動調整メカニズムに全幅の信頼をおいていたからではない。経済学者の処方箋には彼のイデオロギーが含まれ、彼の価値判断が開示されざるを得ないから、自らのイデオロギー的色彩をもつに違いない処方箋の提示を控えたのである。

人々の価値判断が経済政策に入りこんでくるために、どの政策がすぐれているかというような質問は無意味である。個々人の間の評価を比較する妥当な標準はないからである。政策間の評価は、⁽¹⁸⁾ブロードとブリューネットとどちらが好きかという主観的評価と同じである。「一国の貯蓄量は所得分配に依存している」という命題を受容できるかどうかはもっぱら観察と結論との論理的ルールに依存している。ところが「より大きな経済的平等は望ましい」というような言明(価値判断)を受け容れるためにはさらに他の価値判断を必要とする。それゆえこのような言明は分析からの論理的帰結としてはえられない。なるほど「もしも経済学者が自分の環境に対する典型的に歴史的なセンスによって鼓舞されている時には、彼は自分の専門家的な適格性の範囲を逸脱することなくして、歴史的に相対的な忠言を——与えられた環境と結びついている価値判断に関する知識から——発表することもできよう」。⁽¹⁹⁾しかしこのことは、「経済学の進化——ならびにその実践的有用性の進化をも含めて——が、経済学者の半ば政治的な活動によって著しく損われること過去現在を通じて同じであるという事実を、⁽¹⁹⁾変更するものではない」。

(2) 科学は評価や目標設定に有効でない

実践的な問題への処方箋を書こうとすれば、評価や目標設定をしなければならない。ところが価値判断や目標は、とくに階級的に分裂しているため、一義的な社会的目標を設定し、公共の福祉というような観点から評価することは実際上不可能である。公共の福祉とは何かという形而上学的議論が始まるからである。

注(17) [14] 127頁。

(18) [25] 77頁。

(19) [25] 1693頁。

分析と実践の峻別

しかし経済学者が政策的提言をするときにはいつも理論の陰にかくれ、自らの政治的態度を明らかにせず、厳密な科学的分析から離れたところで議論を展開しているのだということを明確にしない。シュンペーターのこのような考え方は政策論議においてこれまで等閑視されてきた。

たとえば現在のわが国における減税問題を取りあげてみよう。所得税減税は全国民の要求であるかのように見える。しかし減税要求の理由はさまざまである。ケインジアンは消費支出を高めて有効需要を増大させるために、野党は不公平税制緩和のために、サプライサイダー達は勤労意欲を高め、貯蓄意欲を高めて豊富な投資資金を創出するために、政治家は間近に迫った選挙の集票のために減税に賛成するであろう。しかし減税を実際に実行しようとするれば、いかなる意図で、どの所得階層の限界税率をいくら引下げるとかをめぐって意見が分れ、経済的利害関係で争いが生じ、短期的効果に注目する人と長期的視野で減税効果を論じる人との間で意見の不一致が生ずることは明らかである。これらそれぞれのグループの意見の相違をそして価値判断の相違を指摘することはできても、経済学はそれを科学的に分析することはできない。理論的に明らかにすることができるのは、限界税率の引下げは労働と余暇、投資と消費のあいだのトレード・オフを変え、相対価格を変化させる。それゆえ勤労および貯蓄インセンティブに作用する、しかも論理的にのみ時間が経過する世界のなかで、ということまでである。

結局、「科学の手段は、その論理的本性からして、事実の解明のためにだけ有効なものであって、評価や目標設定のためにまでも間に合うわけではない。各人はおのが願望の最終的な尺度を自己の胸中にのみ見いだすのであって、科学は彼に、彼が何を望むべきか、何を尊重し、何を軽視すべきかを告げることはできない。所与の願望については、科学にとってなんら判断を下す権限もないけれども、この願望の目標を達成するために、どの方策が適当であり、どの方策が不適当であるかを行為者に述べることができるというかぎりにおいて、科学は行為者に中間目標、つまり副次的目標のみを教えることができるのである」⁽²⁰⁾。

(3) 実践に対するマックス・ウェーバーとシュンペーター

実践に関してマックス・ウェーバーもシュンペーターと同様の議論を展開している。彼の“社会科学および社会政策の認識の「客観性」”という論文によってウェーバーの論旨を確認しておきたい。「抱束力のある規範や理想を発見して、そこから実践にたいする処方箋をひきだせるという期待をかけるなどということは、経験科学の課題では決してありえない」⁽²¹⁾とウェーバーは言う。そして事実を科学的に分析して論述することと、価値判断をおこなう推理とがいつも混同されるために、この混同は専門的研究に害を与えてきた。しかしウェーバーはこの混同を批判したのであって、み

注 (20) [17] 426~7頁。

(21) [27] 53頁。

ずからの理想を述べるべきではないとか、折衷主義が真理であるとか、実践から逃避せよと主張しているのではない。「実践的な志操が欠けていることが科学的な「客観性」を獲得する内面的な根拠になる、などということはない⁽²²⁾」。折衷主義が科学的真理に近い立場であるなどということもない。「中間派」は、極右とか極左とかの党派の理想とくらべて、いささかなりとも科学的な真理の多い立場であるわけでは決してない。面白くない事実や生活の現実がその冷酷さのままにみようとされなければあいほど、科学の関心がながきにわたってみじめにもすてられていることはないのである。いくつかの党派的な見解を総合することによって、あるいは、党派的な見解の若干のものの対角線のうえで、科学的な妥当性のある実践的な規範がえられると考えるような重大な自己欺瞞⁽²³⁾とウェーバーは闘おうとした。ウェーバーは、「実践的な一般命題を、普遍的に妥当する究極的な理想⁽²⁴⁾というかたちでつくりだすこと」は経験科学の課題ではないと主張したが、「事実の真相をみるという科学的な義務と自分自身の理想のために力をつくすという実践的な義務⁽²⁵⁾」はともに重要な課題であると明言した。

ウェーバーのこのような姿勢とくらべると、分析と実践を峻別し、経済学者は実際問題に深く関わり合うべきではないと主張するシュンペーターは余りにも高踏的、相対主義的に映る。

人は時局問題、実際問題を討議し始めるや否や、それに魅了され、分析の限界を忘れてリカードの弊風に染まり、分析と価値判断をおこなう推理との境界を忘れ、自らの専門分野では鋭い分析をしている人が現実の問題で他愛のないおしゃべりを始める。実際問題に深い関わり合いをもてばもつほど、社会はその人を需要し、社会が自分を欲しているという快よい気分のなかで研究者は分析を忘れる。われわれはこのような例を余りにも多くみてきたし、現にみている。シュンペーターが危惧したのはこのことであり、経済学者に厳しい自己規制を説いているともいえよう。社会改革を説き、進歩的政治家や素人たちの理想を満したドイツの講壇社会主義者たちを、人間的にはなく、学問の進歩に何も貢献しなかったという意味で、シュンペーターは嫌悪した。彼らは聴衆に倫理や熱情を吹きこみ、精神を高揚させるかもしれないが、専門技術的に貧弱な講義は、「内科学の教師がその学生たちの分析的能力を涵養する代りに専ら治療の栄光についての美辞麗句のみに酔っている⁽²⁶⁾」ようなものである。

ウェーバーが言うように、事実の真相を究明しようとする科学的義務と、自らの理想のために尽力する実践的義務を両立させることができれば理想的であろう。シュンペーターはウェーバーの主

注(22) [27] 61頁。

(23) [27] 59頁。

(24) [27] 58頁。

(25) [27] 59頁。

(26) [25] 1683頁。

分析と実践の峻別

張に同意しながらも、二つの義務を両立できない人間の能力の限界および弱さを知っていたと私は考えたい。「政治的理想に満たされている者は、特に最善の意思を以てしても、非実践的なまたはしばしば現実には縁遠い研究に対してはなんらの嗜好をもちえず、また全人格を打ちこんでのみ初めて到達されるような研究のときには、その内面的本質に近づきえないのである⁽²⁷⁾」。二つの義務を完遂できない人間の能力、性向、限界を考えるならば、シュンペーターを余りにも高踏的と批判するのではなく、横道へ逸れ、躓き、転びつつであるとはいえ前進する経済学者への警告であったと考えるべきであろう。

(4) 経済学者と処方箋

シュンペーターは『景気循環論』において次のように明言した。「私はなんの政策も勧告しないし、なんの計画も提案しない⁽²⁸⁾」。研究者が果すべき唯一の仕事は、「人々が熱烈に統御しようとして決意しているあの過程を理解」し、この理解を人々に提示することによって「あの決意に用具をあたえ、それを合理化することである」と述べた。そしてこの仕事こそ「今日もっとも必要であり、もっともかけているもの」である。

分析結果と実践上の結論をシュンペーターは直接結合させようとはしない。研究者によって提示された資本主義過程の理解から、「各人はかれの個人的な利害や理想にふさわしい実際の結論を、自分自身のためにひきだすことができる」。そして研究者の分析結果を「もっとも保守的な性質の実践上の結論をえるためにも、もっとも急進的な性質の実践上の結論をえるためにも、使うことができる」とまで述べている。分析結果からいかなる実践的結論を得るかは価値判断あるいはイデオロギーに依存しているからである。

シュンペーターは処方箋を書こうとはしなかった。しかし現実を離れて、研究の道具箱を分析用具で満たしていくことのみを目的にしていたのではない。経済学者は理論的に武装し、理論を用いて現実を捉えなければならない。理論をどう活用するかということ、理論で具体的な状況をどう分析し、どう問題を解くかを学ばなければならない。それをしなければ、研究の道具箱たる理論は錆びつき、生命をもたず、不毛のままにとどまってしまうであろう⁽²⁹⁾。

シュンペーターが自らの課題としたのは、経済学の分析用具を豊富にし、その分析用具を用いて、現実の経済を、資本主義の発展メカニズムを理解することであった。その分析結果から処方箋をひき出そうとすれば、その分析がどのようにすぐれたものであろうと、処方箋のなかに、願望、価値判断、イデオロギー的偏見が混入する。それゆえシュンペーターはたとえ傍観者あるいは敗北主義者と批判されようと敢えて処方箋を書かないという厳しい態度を貫いた。実践的な処方箋を書くこ

注 (27) [13] 276頁。

(28) [20] 2頁。以下の引用も同2～3頁。

(29) [18]

とは研究者の仕事ではない。それをすれば、政策はとりもなおさず政治であるから、研究者は諸政党の争いのなかに巻きこまれ、集団の利害やイデオロギー的偏見のうず巻く不毛な、思弁的な議論の世界へ足を踏み入れることになる。

4

シュンペーターがなぜ政策的提言をしなかったかは彼の資本主義観とも密接に関係している。結論を先に示そう。

①資本主義の発展は、与件の変化によってではなく、内生的なメカニズムによってひきおこされる。

②景気循環は資本主義発展の不可避的形態であり、民間経済の不安定さを示すものではない。

③世界大恐慌は資本主義体系の弱化ではないし、資本主義の没落を示すものでもない。景気循環の1つの表現である。

④したがって恐慌時の大量の失業は本質的に一時的な現象である。

⑤投資機会が消滅する兆しはなにもない。したがって政府が介入すべき理由はここにはない。

⑥政府の介入は資本主義発展のメカニズムを阻害する。

かくして失業を減少させるために、あるいは不活発な民間活動に代って、政府が介入すべき理由はない。したがって経済政策を論ずる必要は生じない。

(1) 資本主義は内的発展メカニズムをもつ

資本主義過程のもっとも注目すべき事柄はその進化的性格である、とシュンペーターは言う。ところが古典派の理論家たちは、発展を体系内部から説明しようとせず、与件の変化によって説明しようとした。社会以外の与件(自然状態)の変化、経済以外の社会的与件(戦争、商業政策、社会政策、経済政策)の変化、消費者嗜好の変化が均衡点を変え、別の均衡状態へ向かう経済的過程を、古典派の理論家たちは追求してきた。アダム・スミス(1723~1790)が「進歩について語る場合にはいつでも、彼は進歩を経済的過程自体の中から説明することなく、単に規則的に期待しうる与件の一定の変動の助けをかりて説明⁽³⁰⁾」した。リカード(1772~1823)において「進歩」という概念は、与件の変動によって攪乱された均衡状態の与件変動への反作用として捉えられているにすぎない。ジョン・スチュアート・ミル(1806~1873)は重要な命題を提出した。われわれは「静止的かつ不変的社会の経済法則」を与えるだけでなく、「人類の経済状態を変化するものとして考察」し、「均衡の理論に対して運動の理論を……静学に対してその動学を付加」しなければならいと述べた。しかしミル

注(30) [12] 150頁。

分析と実践の峻別

にとって進歩は経済外的なもののみなされ、「単に生産および分配に「影響を及ぼす」にすぎない
与件に根ざすもの」と考えられている。進歩は内的メカニズムによってではなく、自発的なもの
として現われ、経済に対して外から働きかけるものと考えられている。結局、ミルも経済発展の原因
と過程そのものを説明するには到らなかつた⁽³¹⁾。

このような古典派の比較静学の方法では、経済生活そのものがそれ自身の与件を急激に変えるよ
うな場合を分析することはできない。本質的に静態的なこれまでの理論は、「生産革命の発生やそ
れにもなって現われる現象」が起こってしまった場合の新しい均衡状態を研究することができる
だけであって、このような変化の結果を正確に予測することも、「いかにしてそのような変動が実
現されるか、またそれはいかなる経済現象を発生させるか」を明らかにすることもできない。とこ
ろがこのような生産革命の発生こそシュンペーターの問題とする発展にはかならない。

生産革命の発生は与件として外部から経済体系に与えられるものではない。それは「純粋に経済
的——体系内部的」である。しかしそれは連続的に発生せず、経済の枠や慣行の軌道そのものを
変更する⁽³²⁾。この生産革命は、年々歳々同一軌道でくりかえされる経済循環の連続的な、微分的な歩み
から生まれてくるものではない。「郵便馬車をいくら連続的に加えても、それによってけって鉄
道をうることはできない⁽³³⁾」。

経済発展とは、郵便馬車から鉄道への変化のように、純粋に体系内部的でありながら非連続的に
のみ現われる新結合の遂行によってもたらされる。新結合を遂行し、それを経営体などに具体化す
るのは企業者であって消費者ではない。したがって、経済の革新はつねに生産の側から生ずる。絶
えず創造し、革新を遂行しなければならない、というのが資本主義社会の企業者であり、その機能
を果さなければ没落が待っているだけである。

以上述べてきたシュンペーターの資本主義観は次の文章に見事に要約されている。「資本主義は
本質的に（内生的な）経済変動の過程である。この変動、またはもっと正確に言えば、われわれの
発展と呼んできた種類の変動なしには、資本主義社会は存在することはできない。けだし、資本主
義社会の指導的階層——資本主義機構を運営する階層——の経済的機能および、この機能とともに
その経済的基盤は、もし変動が止まれば崩壊するだろうし、革新がなければ企業者はなく、企業者
の成功がなければ資本家利得も資本家の推進もないからである。産業革命の——『進歩』の——雰
囲気は、資本主義が生き延びることのできる唯一の雰囲気である。従って、資本主義組織は、革新
のための機会がなくなる場合には、『生産関数の変化』が資本主義の生活過程にとって一随伴事件
であってその本質でない場合のように、致命的な影響をこうむることなしに定常状態に落ちつく

注 (31) [12] 156頁, 167~8頁。

(32) [12] 171頁。

(33) [12] 180頁。

いうわけにはいかない。この意味で、安定した資本主義というのは形容矛盾である⁽³⁴⁾」。

資本主義社会において企業者はたえず創造しなければならない。「資本主義の一切の典型的現象、その成果、問題、栄枯盛衰などの一切は、景気循環をも含めて、この過程から由来する⁽³⁵⁾」。「静態的⁽³⁶⁾社会主義はなお社会主義であるだろう⁽³⁶⁾」が、静態的資本主義はありえず、形容矛盾であるというこの表現ほどシュンペーターの資本主義観を縮約している表現はない。

（2）マルクス評価

「ブルジョア階級は、生産用具を、したがって生産関係を、したがって全社会関係を、絶えず革命していなくては生存しえない。これに反して、古い生産様式を変化させずに保持することが、それ以前のすべての産業階級の第一の生存条件であった。生産の絶えざる変革、あらゆる社会状態の間断なき動揺、永遠の不安定と運動は、以前のあらゆる時代に対するブルジョア時代の特色である。固定した、錆びついたすべての関係は、それにとともなう古く尊い、一連の観念や意見とともに解消する。そしてそれらがあらたに形成されても、それらはすべて、それが固まるまえに、古くさくなってしまふ。一切の身分的なものと常在的なものとは、煙のように消え、一切の神聖なものはけがされ、人々は、遂に自分の生活上の立場、その相互関係を、ひややかな眼で見ることを強いられる。

「ブルジョア階級は、かれらの百年にもみたくない階級支配のうちに、過去のすべての世代を合計したよりも大量の、また大規模な生産諸力を作り出した。自然力の征服、機械装置、工業や農業への化学の応用、汽船航海、鉄道、電信、全大陸の耕地化、河川の運河化、地から湧いたように出現した全人口——これほどの生産諸力が社会的労働のふところのなかにまどろんでいたとは、以前のどの世紀が予感した⁽³⁷⁾だろうか？」

これは『共産党宣言』からの引用である。この引用からわかるように、マルクスは経済過程の内在的進化を認識していた、それはマルクスの真に偉大な業績であると、シュンペーターは高く評価する。与件変化に対して均衡点がどこへ移動するかを分析したにすぎない古典派の世界のなかで、マルクスだけが将来の資本主義エンジンの規模と能力を正しく認識した。マルクスにとって経済発展は均衡点から均衡点への移動ではなかった。経済発展はマルクスの中心的なテーマであり、「経済過程がいかに、それ自らの内在的論理の力によって自己自らを改変しながら、絶えず社会的骨組み——事実において社会の全体——を⁽³⁸⁾変革するか」を分析した。労働価値説、階級論などについてはマルクスを厳しく批判しながらも、マルクスの経済学のなかで、「自力で歴史的時間のなかに進

注 (34) [20] 1549頁。

(35) [23] 21頁。

(36) [23] 20頁。

(37) [8] 43～4頁、46頁。

(38) [25] 1204頁。

分析と実践の峻別

(39)

行するがごとき経済過程の理論という考え方」を高く評価するところにまさにシュンペーターの資本主義観が表明されている。しかしシュンペーターがマルクスに頌辞を呈するのはこの点のみであって、マルクスが資本家を資本の論理によって操られているだけの没個性的な、労働者階級を搾取する非人格的な人間とみなし、主体を離れた客観的歴史過程を強調するとき、マルクスと訣別する。シュンペーターの企業者はマルクスの嘲笑する資本家でもなく、階級でもなく、古典的な経済人でもない。「企業者」とは「新結合の遂行をみずからの機能とし、その遂行にあたって能動的要素となるような経済主体のことである」⁽⁴⁰⁾。単に企業を循環的に経営している人は「企業者」ではない。新結合を遂行する企業者こそ経済発展の担い手であり、この企業者機能がもっとも開花するのは競争原理が貫徹する資本主義社会においてである。したがって資本主義の発展は、不況を緩和したり、失業者を一時的に救済するために政府が経済に介入することにかかっているのではなく、企業者機能が発揮される競争環境が維持されるかどうかにかかっている。このことが後に検討するように政府の介入と関連する。

(3) 世界恐慌は体系の弱体化ないし失敗の兆候ではない

景気循環は資本主義的発展の不可避の形態である。不況は「正常な吸収過程ないし整理過程」であり、「恐慌——パニック、信用体系の崩壊、破産の蔓延——の勃発とその波及効果の特徴とする経過」は「異常な吸収過程ないし整理過程」⁽⁴¹⁾であるとシュンペーターは言う。いいかえれば、景気循環は経済発展の随伴現象である。「好況の利得も不況の損失も無意味、無機能なもの」ではない。それは「経済発展のメカニズムの本質的要素」であり、もし好・不況を排除しようとするれば、このメカニズムを歪めることなしには排除不可能である⁽⁴²⁾。スウィージーの表現を借用すれば、シュンペーターにあっては、景気循環は資本主義経済にとって「短期的には不愉快であるが、長期的には必要な、回復作用力とみなされている」⁽⁴³⁾。

1929年第IV四半期から1932年第III四半期まで続いた不況も、資本主義生産の推進機構に永続的な裂け目が生じたことを立証するものではない。この程度の激しさの不況は、だいたい55年に1回ぐらいくらゝかえされている。この世界大恐慌は、コンドラチェフ、ジュグラール、キッチンの3循環の谷が一致した不幸な時期にあたる。資本主義は非常な成功を収めるがゆえに、それを擁護している社会制度をくつがえし、不可避的にその存続を不可能ならしめる。その意味で「資本主義とその文明は崩壊しつつあり、ある他のものに漸変しつつあるか、非業の最後をめぐらしてよるめき動きつつ

注 (39) [22] 81頁。

(40) [21] 198頁。

(41) [12] 232頁。

(42) [12] 261頁。

(43) [26] 191頁。

あるかもしれない。……しかし世界恐慌はそれを証明するものではないし、事実それとはなんの関係もない。世界恐慌は体系の弱体化ないし失敗の兆候ではなかった。どちらかといえば、それは資本主義的発展の活力の証左であり、資本主義的発展にたいする——実質上——一時的な反作用であった。そうしてとにかく、それは——またも実質上——なんら新規なでき事ではなく、新しい要因の出現を意味する前代未聞の破局ではなんらなかったのであって、類似の機会にまえに起ったこと⁽⁴⁴⁾の再現にすぎないものであった」。

大恐慌に対するシュンペーターの上述の解釈は、いうまでもなく、大恐慌を「資本主義体制の恒久性にたいする脅威」(スウィーージー)、あるいは「資本主義の死相」(カウツキー)とみるマルクス主義者のそれとは決定的に異なっている。また大恐慌は民間経済の不安定さの証左でもない。むしろ発展の活力も大きいゆえにその反作用も大きいという「資本主義的発展の活力の証左」である。したがって1930年代の大量の失業も、死滅しつつある資本主義の必然的産物ではない。そもそも資本主義機構そのものに内在する原因によって失業率が長期的に増大する傾向などない。異常に大きな失業は、各産業革命の繁栄面に続く調整過程のひとつの特徴にはかならない。それゆえ異常に大きな失業は、「本質的に一時的な現象」にすぎない⁽⁴⁵⁾。資本主義はまだ十分な発展への活力をもっており、失業も活力の反作用によって生じた一時的なものである以上、なぜ失業を重大視する必要があるか。失業救済措置を講ずることによって、「つねに不況に帰せしめられる淘汰の作用を無効にし、適応不能者や生活不能者を引きずっていくという目に見えない犠牲を国民経済に課す」こと⁽⁴⁶⁾にはならないだろうか。すなわち失業救済措置は内在的な資本主義発展メカニズムの阻害要因とはならないだろうか。

ケインズも、シュンペーターと同じように、大恐慌を資本主義の凋落の証左とはみていない。「1930年の大不況」という論文でケインズは次のように述べている。「われわれの生活が今年、現代史上最大の経済的破局の淵にのぞんでいるという事実を、世界は遅まきながら認識しようとしている」。しかしその恐怖は度を過ぎている。過去は楽しい夢にすぎず、夢から醒めれば暗い現実が待っているだけだと市井の人々は疑念を抱きはじめている。そうではない。過去は夢ではなかった。現在こそ悪夢であり、それは朝になれば消え去るのである。「なぜならば、天然資源と人類の創意工夫は、まったく従来どおり豊かで生産的だからである」。ところが現在、生産費以下の販売収入しか得られないというような困難な状況に陥っている根本原因は、資本投資の市場が不十分なために、新たな企業が現われないということにある。利率が高く、物価が下落しているとき新規に事業を企てる人がいるだろうか。とくにアメリカでは過去5年間大規模に企てられた新規の投資事業のために、現在の景気沈滞の雰囲気のもとではますます利益をみこめる事業機会は少なくなっ

注(44) [20] 1358頁。

(45) [22] 128頁。

(46) [12] 262頁。

分析と実践の峻別

まった。新規投資の機会は限定されあるいは以前より危険を孕んでいる。

このような困難な状況に対して、もっとも効果的な救済策は、三大債権国アメリカ、フランス、イギリスの中央銀行が国際長期債市場の信頼を回復させるために、一致協力して大胆な計画に参加することである。このような将来への確信の回復によって、資本主義というわれわれの自動車を再び始動させることができる。「機械は、たんに混乱の結果、故障したにすぎない。しかし、自動車の磁石発電機 (magneto) が故障したからといって、すぐにもがたがた馬車に舞いもどることになろうとか、自動車の運転はもうおしまいだとか臆断するには及ばない」⁽⁴⁷⁾。

一見楽観的にみえるケインズのこの論調も、資本主義の発展メカニズムに対する信頼では、シュンペーターと著しい相違を示す。「われわれの生活している経済社会の顕著な欠陥は、完全雇用を提供することができないことと、富および所得の恣意的な不公平な分配である」⁽⁴⁸⁾とケインズは言う。民間経済には完全雇用を維持していくに必要な総所得に見合うだけの消費支出と投資支出をつくりだす能力はない。消費性を簡単に上げることができず、総所得と消費のギャップを埋めるほど大きな投資支出を民間に期待できない以上、政府支出によってこのギャップを埋めなければならない。とくに資本の限界効率が崩壊して投資支出が激減し、雇用が転落し、総消費支出も減少する恐慌時に、失業者に職を与えるための政府の役割は増大する。

(4) 政府の介入は内在的な資本主義発展のメカニズムを阻害する

シュンペーターも、失業問題を憂慮する必要はないとは言っていない。「永続的たると一時的たるとを問わず、また悪化すると否にかかわらず、失業が過去現在をつうじての悩みの種であることは疑いない」⁽⁴⁹⁾からである。しかし資本主義社会における真の悲劇は、失業そのものではなく、「失業に加うるに、それ以上の経済発展の諸条件を傷つけることなしに、失業者を十分に世話しえないということにある」⁽⁵⁰⁾。

完全雇用を目的とする大幅な政府の介入、労働市場の統制、公共企業の拡張、社会保障立法、これらは自由放任の原理から資本主義を離れさせ、内在的な資本主義発展のメカニズムを阻害するであろう。⁽⁵¹⁾ 1930年代後半になっても、アメリカが大量の失業者をかかえていたのは、ニューディールの反資本主義的政策によって、必然とされる以上に失業者が増大したからである。新財政政策、新労働立法、私的企業に対する政府の態度が全面的に変化したためそれへの順応に困難が伴ったこと、これらが資本主義の活動の能率を減退させ、景気の回復を遅らせた。

注 (47) [5] 154頁。

(48) [7] 375頁。

(49) [22] 129頁。

(50) [22] 129頁。

(51) [22] 795頁。

たとえば、ニューディールの反資本主義的政策の典型として未配当利潤税がある。「反貯蓄理論およびこの時代の怨根は、7%から27%にわたる未分配法人所得にたいする特別付加税(未配当利潤税)の中にきわめて特徴のある表現をみいだした」とシュンペーターは、ケインズのマクロ経済政策およびビッグ・ビジネスを攻撃する時代風潮を批判しつつ論を進める。この税によって、体系支出が増加し、あるいはその減少を相殺するのに役だった分配所得の絶対的・相対的增加がもたらされたかもしれない。不活発な、用途を見出しえない民間資金を税として吸い上げ、政府支出として放出するこの政策は、ケインズ的な意味では成功であろう。しかし「それにもかかわらず、この方策は一般に革新企業および投資に麻痺的な影響を多分与えただろう。蓄積『準備金』の現実の存在および準備金を迅速に蓄積する可能性は、直面している革新および膨脹の危険と見込みについてのある企業の立場を強化する」。ところが十分な準備金がなければ、あるいはその獲得または補充の便宜が少なくなれば、企業は全くちがった、はるかに慎重な事業政策を強いられる。「好況期には、投資機会は縮尺比例の透視画としてみられるだろうし、不況期には、企業は暴風雨にずっと容易に屈せねばならないだろう。とりわけ、後者の場合、つねに多くの企業を誘って、いちじるしい直接損失を蒙ってさえもしばらくの間『抵抗する』ようにさせた重要な種類の考慮——なかならず純粋な事業上の考慮——は、事業家の脳裡から消滅しがちだろう。発展の担い手である企業者へのこのような影響を等閑に付して、マクロ的な有効需要効果の観点からのみ議論が展開されるのは、「経済学者たちが集計的理論というからくりで没頭」しているからである。未配当利潤税の革新企業および投資への影響というミクロ的な、しかし経済発展にとってもっとも根本的かつ重要な問題が経済学者の脳裡から消滅してしまっているのは、彼らが「集計的理論というからくり」に心を奪われているからである。自動車工業が典型的であるが、主要な産業は、もし未配当利潤税⁽⁵²⁾などという制度のもとではあれほど決して発展しなかったであろう。

ニューディールの反資本主義的政策のなかで、労働政策は、主として賃金率をつり上げることによって生産費を上昇させ、投資機会を減少させた。またビッグ・ビジネスに対する敵意によって、投資機会がその効果を十分発揮することが阻止された、とシュンペーターは考える⁽⁵³⁾。

このような、政府の介入によって企業家精神が減退することを憂えるシュンペーターの資本主義観は、短期的な金融・財政政策によって有効需要を管理し、完全雇用を追求するケインジアンのもそれとは決定的に異なっている。シュンペーターは、ケインズが短期的分析において与件としてあつかった一定の生産技術それ自体が、資本主義の内的メカニズムによって長期的にどのように変化するかを問題にした。失業救済のための政策的措置を議論したのも、短期的な雇用効果の視点からではなく、資本主義発展のメカニズムとの関連においてであった。

注(52) [20] 1555~6頁。

(53) [20] 1561~3, 1567頁。

分析と実践の峻別

大量失業を本質的に一時的な現象とみるシュンペーターが、もし失業問題に関して政策提言を行うとすれば、不況期にのみ適用される一時的救済に限られ、企業家精神を損なう内容でないかどうかという側面も検討されるであろう。しかしこの「もし」を想像することさえシュンペーターに忠実ではないにちがいない。なぜなら一時的救済措置は結局恒久的になるであろうということを、シュンペーターは十分予想していたからである。失業者救済という義務に敏感になったが最後、「世論が経済的に不合理な救助資金調達方法を主張し、かつその緩慢にして浪費的な管理方法を主張するにいたる⁽⁵⁴⁾」であろうという経済社会学的考察から、「もし」を想定することさえ非現実的である。

現に、政府の経済への介入は、大恐慌時の一時的な現象ではなく、戦後も持続し、むしろ増大した。それをケインジアン⁽⁵⁴⁾の勝利とみなす人もいよう。しかしシュンペーターは全く異なった評価をする。

(5) 資本主義の原理——自由放任からの離脱

次の事実は、社会主義に反対し、それに向かういかなる傾向の存在をも否定する経済学者によつてさえ認められている、とシュンペーターは言う。

- ①安定政策、すなわち実業界の事物に対する大量の公共管理
- ②所得平等化とそれに関連した再分配的課税
- ③物価を統制するための諸方策
- ④労働市場や金融市場に対する統制
- ⑤公企業によって満たされるべき欲望分野の無制限の拡大
- ⑥社会保障立法

この事実は、われわれは「自由放任の原理からはるかに遠く離れたところまできている」ということであり、さらに「私的企業の運用を真正の社会主義的計画と異ならないような仕方⁽⁵⁵⁾で条件づけるように、資本主義的諸制度を発展させかつ規制することができる」ということを意味している。

所得平等化という理念のもとで、「租税と賃金政策とによってマルクス主義者のいわゆる剰余価値の大部分をブルジョア階層からしぼり取りうる⁽⁵⁶⁾こと」が第2次大戦後の大きな特徴である。これは「資本主義秩序の法的骨格を形式的には破壊することなしに、……ブルジョア社会の構造の相当程度まで改廃⁽⁵⁷⁾しうる」ということを意味する。しかしこの措置は、能率の喪失、資本主義の原動力を麻痺せしめるであろう。なぜなら企業利潤は、マルクス主義者のいうように労働者階級に対する搾取によって得られるのではなく、新結合を遂行する企業家の機能に対して与えられる報酬である

注 (54) [22] 130頁。

(55) [22] 795頁。

(56) (22) 722頁。

(57) [22] 718頁。

から、産業上の成功に対するこの高いプレミアムが政府によってしぼり取られるならば、企業家の投資意欲は減退するにちがいないからである。

その他、労働問題、価格統制、反トラスト問題等々、政府の民間経済への絶えざる介入は、企業経営の成功の意味を歪めてしまう。企業家の成功は事業才能ではなく、政治家や官吏や労働指導者との取り引きの才にも依存するようになるであろう。

資本主義がこのような方向へ進みつつあることは、価値図式、生活態度、不平等と家族財産の文明が急速に崩壊しつつあることを意味し、資本主義の推定相続人は中央集権的な社会主義であるにちがいない。

シュンペーターは上述①～⑥の諸政策を否認したり、あるいは批判したりしようとは思わないと述べた。また急速に過ぎ去りつつある資本主義文明という事実を、好むにまかせて、各人は喜ぶことも悲しむこともできようときわめて冷静な目で流れをみつめていたとも述べた。研究者としては歴史の流れを見つめているだけで良いかもしれないし、それ以上のことはすべきでないかもしれない。しかし流れをつくるのが人間ならば、流れを変えるのも人間である。資本主義的發展の担い手として新結合を遂行する能動的で、聡明で、ダイナミックな企業家を登場させたシュンペーターが、戦後、資本主義の方向については突然受動的・虚無的になる。資本主義丸は沈没しつつあるという報告を受けた船員は座して酒を飲んでいることもできるが、「船を救うべくポンプに突進⁽⁵⁸⁾」するに違いない。現に、サッチャー政権のイギリスで、レーガン大統領のアメリカでなされつつあるのはこの突進ではなからうか。それとも現在のイギリスやアメリカの政策転換は、流れに逆らう一時的現象にすぎず、結局は大河に流され、社会主義という港に辿り着くのであろうか。①～⑥の流れは不可避で不可逆的であるとシュンペーターは考えたに相違ない。シュンペーターは政策的提言を拒否する姿勢を見事に最後まで貫いた。そうであるがゆえにまた政策転換の可能性を過小評価した。古典派への回帰は、短期的性格をもつ「集計的理論というからくり」から、シュンペーターが高く評価した資本主義発展メカニズムの再認識へと進みつつあることを示している。

（6）投資機会は消滅していない

ケインズは1931年に、われわれは非能率的で、貧しく、資本をくいつぶしているという悲観論者を批判して社会に勇気を与えようとした。「私たちは青少年期の成長期神経痛に悩んでいるのであって、老年期のリュウマチに悩んでいるのではない。……私たちは私たちの可能性を十分利用しえずにいる」のであり、「大きく増大した生産力と生産的エネルギーの吐け口を見つけそこなっている……それゆえ私たちは弱音を吐いてはいけ」ない。「積極的にならなければならない……個人と

注(58) [22] 序文47頁。

分析と実践の峻別

しても国民としても、活動力と大胆さと進取の気概こそが救済策である⁽⁵⁹⁾」。

この楽観的論調にもかかわらず、ケインズは、民間経済の積極さや進取の気概によって「私たちの可能性を十分利用」できるとは考えていなかった。資本主義社会の潜在的生産力を実現させるために、中央機関による通貨および信用の慎重な管理、投資の方向と規模の国家的見地からの調整、人口問題に対する国家的政策が現在政府がなすべきことである⁽⁶⁰⁾。「消費性向と投資誘因とを相互に調整する仕事にともなう政府機能の拡張⁽⁶¹⁾」がなければ完全雇用を維持できないというケインズの主張は、投資機会が少なくなっているという見解にもとづいている。そのため「投資の社会化」を主張し、政府の役割に期待した。

これに対してシュンペーターは、投資機会が消滅しつつあるという悲観的見解は全く根拠がないとして、理由をひとつひとつとりあげ、詳細に論駁を加えている（〔22〕第10章）。したがってこの点に関しても、ケインズのように政府による調整の必要がなく、政府はなにをなすべきかを議論する必要がない。

おわりに

処女作『理論経済学の本質と主要内容』以来、『経済分析の歴史』に到るまで、シュンペーターは一貫して、分析と実践を峻別し、一切の政策論議、時局問題の討議には加わらなかった。政策は政治である。政治であるからには、政党の、そして人々の利害、対立、軋轢、願望、イデオロギーから無縁ではない。

経済学者はいつも狭隘な理論の限界を超えて、いきなり実践的処方箋を書き、物好きにも政治に口出ししてきた。結果は経済理論が政治的利害や対立に巻き込まれ、敵意さえ生まれ、研究者は分析を忘れることになった。さらに経済学者は、経済の重要なパラメータである賃金、物価、利子を政治的領域に引き渡し、経済の内的発展メカニズムを信頼せず、「集計的理論というからくり」に心を奪われ、企業家のインセンティブを等閑に付してきた。

シュンペーターは理論から形而上学的色彩を払拭し、理論と実践を峻別し、価値判断から自由な分析命題を確立することによって経済学を真の科学たらしめようとした。実践的勧告によって華々しく振舞い、時代の寵児となる道を選ばず、分析家としてシュンペーターは終始した。時代はこのシュンペーターを再評価しつつも、「リカードの弊風」は依然跡を絶たない。シュンペーターは泉下で苦笑しつつ言うにちがいない。「経済学はなぜいつまでも年をとらないのか」と。

注 (59) [6] 168頁。

(60) [4] 349～350頁。

(61) [7] 383頁。

[参 考 文 献]

- [1] 伊達邦春(1979).『シュンペーター』,日本経済新聞社。
- [2] Heertje, A. ed. (1981). *Schumpeter's Vision*, Praeger Publishers, 西部邁・松原隆一郎・八木甫
訳『シュムペーターのヴィジョン』,ホルト・サウンダース,1983.
- [3] Janik, A. and S. Toulmin (1973). *Wittgensteins Vienna*, Simon and Schuster, 藤村龍雄訳『ウ
ィトゲンシュタインのウィーン』,TBSブリタニカ,1978.
- [4] Keynes, J. M. (1926). The End of Laissez-Faire, *Laissez-Faire and Communism*, New Repu-
blic, Inc. 第I部,宮崎義一訳『説得論集』,ケインズ全集9,東洋経済新報社,1981に所収。
- [5] —————(1930). The Great Slump of 1930, *The Nation and the Athenaeum*, Vol. XLVIII,
宮崎義一訳『説得論集』,ケインズ全集9,東洋経済新報社,1981に所収。
- [6] —————(1931). The Problem of Unemployment-II, *the Listener*, January 14, 1931, 宮
崎義一訳『説得論集』,ケインズ全集9,東洋経済新報社,1981に所収。
- [7] —————(1936). *The General Theory of Employment, Interest and Money*, The Macmi-
llan Press Ltd., 1971, 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』,ケインズ全集7,東洋経
済新報社,1983.
- [8] Marx, K. and F. Engels (1848). *Manifest der Kommunistischen Partei*, 大内兵衛・向坂逸郎訳
『共産党宣言』,岩波文庫,1951.
- [9] 大野忠男(1971).『シュンペーター体系研究』,創文社。
- [10] Schorske, Carl E. (1980). *Fin-De-Siècle Vienna, Politics and Culture*, Alfred A. Knopf, Inc., 安
井琢磨訳『世紀末ウィーン—政治と文化—』,岩波書店,1983.
- [11] Schumpeter, J. A. (1908). *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*,
Duncker & Humblot, 木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』,日本評論社,1936.
- [12] —————(1912). *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Duncker & Humblot, 塩野谷
祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』,岩波文庫,1977.
- [13] —————(1914). *Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte*, J. C. B. Mohr, 中山伊知郎
・東畑精一訳『経済学史』,岩波文庫,1980.
- [14] —————(1915). *Vergangenheit und Zukunft der Sozialwissenschaften*, Duncker & Hum-
blot, 谷嶋喬二郎訳『社会科学の未来像』,講談社学術文庫,1980.
- [15] —————(1918). *Die Krise des Steuerstaats*, Leuschner & Lubensky, 木村元一・小谷義次
訳『租税国家の危機』,岩波文庫,1983.
- [16] —————(1919). *Zur Soziologie der Imperialismen*, J. C. B. Mohr, 都留重人訳『帝国主義
と社会階級』,岩波書店,1956.
- [17] —————(1926). Gustav v. Schmoller und die Probleme von heute, *Schmoller's Jahrbuch*,
Vol. L, 中村友太郎・島岡光一訳『歴史と理論——シュモラーと今日の諸問題』,玉野井芳郎監修『社会
科学の過去と未来』,ダイヤモンド社,1972に所収。
- [18] —————(1931). “経済学の「危機」”, 杉山忠平訳, 別冊「経済セミナー」シュンペーター再
発見, 日本評論社, 1983に所収。
- [19] —————(1933). The Common Sense of Econometrics, *Econometrica*, Vol. I.
- [20] —————(1939). *Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the*

分析と実践の峻別

- Capitalist Process*, McGraw-Hill Book Co., Inc., 吉田昇三監修, 金融経済研究所訳, 『景気循環論』, 有斐閣, 1958~1962, 全5巻。
- [21] —————(1946). *Keynes and Statistics, Review of Economic Statistics*, Vol. XXVIII.
- [22] —————(1947). *Capitalism, Socialism and Democracy*, Harpe & Brothers, Revised Edition, 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』, 東洋経済新報社, 1950~52, 改訳版, 1962, 全3巻。
- [23] —————(1950). 大野忠男訳『今日における社会主義の可能性』, 創文社, 1973, 8篇の論文集。
- [24] —————(1951). *Ten Great Economists: from Marx to Keynes*, Oxford University Press, 中山伊知郎・東畑精一監訳『十大経済学者』, 日本評論社, 1952.
- [25] —————(1954). *History of Economic Analysis*, Edited by E. B. Schumpeter, Oxford University Press, 東畑精一訳『経済分析の歴史』, 岩波書店, 1955~62, 全7巻。
- [26] Sweezy, Paul M. (1956). *The Theory of Capitalist Development*, 都留重人訳『資本主義発展の理論』, 新評論, 1967.
- [27] Weber, Max (1904). 出口勇蔵訳“社会科学および社会政策の認識の「客観性」”, 『世界の大思想3 ウェーバー』, 河出書房新社, 1973 に所収。
- [28] 吉田昇三 (1974). 『ウェーバーとシュムペーター』, 筑摩書房。
- [29] Zweig, Stefan (1940). “昨日のウィーン”, 猿田真訳『時代と世界』, ツヴァイク全集21, みすず書房, 1974 に所収。
- [30] —————(1944). 原田義人訳『昨日の世界』 I, II, ツヴァイク全集19, 20, みすず書房, 1973.

(経済学部教授)